基礎心理学入門
第一章
心理学の歴史(2)

2009/10/15

田山　忠行

先週の復習

- ブレンターノの作用心理学
  - 心の作用を主眼におくべきとした。
  - ヴントと対比するならば、
    ヴント：内容心理学 ⟷ ブレンターノ：作用心理学

- ヴント
  - 意識心理学 ⟷ 無意識（フロイト）
    要素主義 ⟷ 全体主義（Gestalt心理学）
    構成主義 ⟷ 機能主義（ジェームズ、キャッテル）
    内省主義 → 純粋内省主義（ティティナー）

- 機能主義や純内省主義から、ワトソンの行動主義へ。

今週の概観(1)

- 20世紀初頭
  - アメリカでは:
    構成主義 対 機能主義 → 行動主義(ワトソン)へ
  - ドイツでは:
    要素主義 → 形態主義(ゲシュタルト心理学)へ
    (ウェルトハイマー、ケーラー、コフカ)
  - その他:条件反射(パブロフ)、精神分析(フロイト)など

- 20世紀半ば(1930-1960)
  - 操作主義(ブリッジマン) ➡ スキナー、スティーブンスへの影響
  - 新行動主義(トールマン、ハル、スキナー)
  - 発達心理学(ピアジェ)、エソロジー

今週の概観(2)

- 現代
  - 行動主義 対 認知主義 → 認知心理学の台頭
  - 情報理論
  - 言語学(チョムスキー)
  - 情報処理的アプローチ(コンピュータ・サイエンスの進展に伴い)
  - 人工知能(AI)研究
  - PDPモデル(並列分散処理)
  - 計算論的アプローチ(マー)
  - 認知科学
  - etc…

19世紀末

- ジェームズ（William James）（1842-1910）
  - 意識状態の変化を記述する。
    「意識は流れであり、連続的に絶えず変化している。」
  - 情緒について：
    「悲しいから泣くのではない。泣くから悲しいのである。」
    →環境に対する反応が情緒を引き起こす
    →ジェームズ・ランゲ説として有名。
    （同時期にランゲ（Lange）が同様の主張をした）

- 機能主義
  心（意識）は環境への適応の一形態とし、そのような心（意識）の目的や働きなどを明らかにすべきと考えた。

20世紀初頭(1)

- ワトソン(Watson)(1878-1958)
  - 行動主義:
    内観の否定、刺激と反応に着目した。

Black Box

Stimulus -(内的過程)- Response ⇒ SR心理学
(刺激) (反応)

  - SとRの間の内的過程はわからないこと(Black Box)として不問にし、刺激と反応という観測可能な要素を研究対象とした。
  - アルバート坊やの実験
    乳児に、ネズミを見せる。乳児がネズミに触ろうとするとドラを叩く。ドラが鳴ると幼児は驚いて泣き出してしまう(=恐怖刺激)。
    これを繰り返すと、そのうちネズミを見ただけで逃げ出したり、泣き出してしまう。(=ネズミと恐怖刺激の結合)

20世紀初頭(2)

- ウェルトハイマー(Wertheimer)(1880-1943)
- ケーラー(Kohler)(1881-1967)
- コフカ(Koffka)(1886-1941)

→ Gestalt心理学

- ソーンダイク(Thorndike)(1874-1949)
  - 実験:ネコの問題箱
    試行錯誤(try and error)。試行回数が増えるに従って、ネコが箱から出る時間が徐々に短くなる)

20世紀初頭(3)

- パブロフ(Pavlov)(1849-1936)
  - 条件反射
- フロイト(Freud)(1856-1939)
  - 心理学ではなく、精神医学
  - 意識を対象としたヴントに比して、無意識に注目
  - 精神分析学の祖
- アドラー(Adler)(1870-1937)
  - 個人心理学
- ユング(Jung)(1875-1961)
  - 分析心理学

20世紀半ば(1)

- ブリッジマン(Bridgman)(1882-1961)
  - 操作主義(スキナー、スティーブンスへ影響)
- トールマン(Tolman)(1886-1959)
  - 新行動主義(S-Rから、S-O-R理論)
  - 認知地図
  - ネズミの試行錯誤の実験
    ネズミに迷路の問題を解かせる。
    1. ゴールにエサを置かない　　→学習がみられない
    2. 1.の後、ゴールにエサを置く　　→学習が成立する
       ⇒1.と2.の間にも、潜在的に学習が行われていたと考えられる。
- ハル(Hull)(1884-1953)

20世紀半ば(2)

- スキナー(Skinner)(1904-1990)
  - 新行動主義
  - オペラント心理学
- スティーブンス(Stevens)(1906-1973)
  - 新精神物理学
- ピアジェ(Piaget)(1896-1980)
  - 発達研究(作用心理学に影響を受けた)

現代

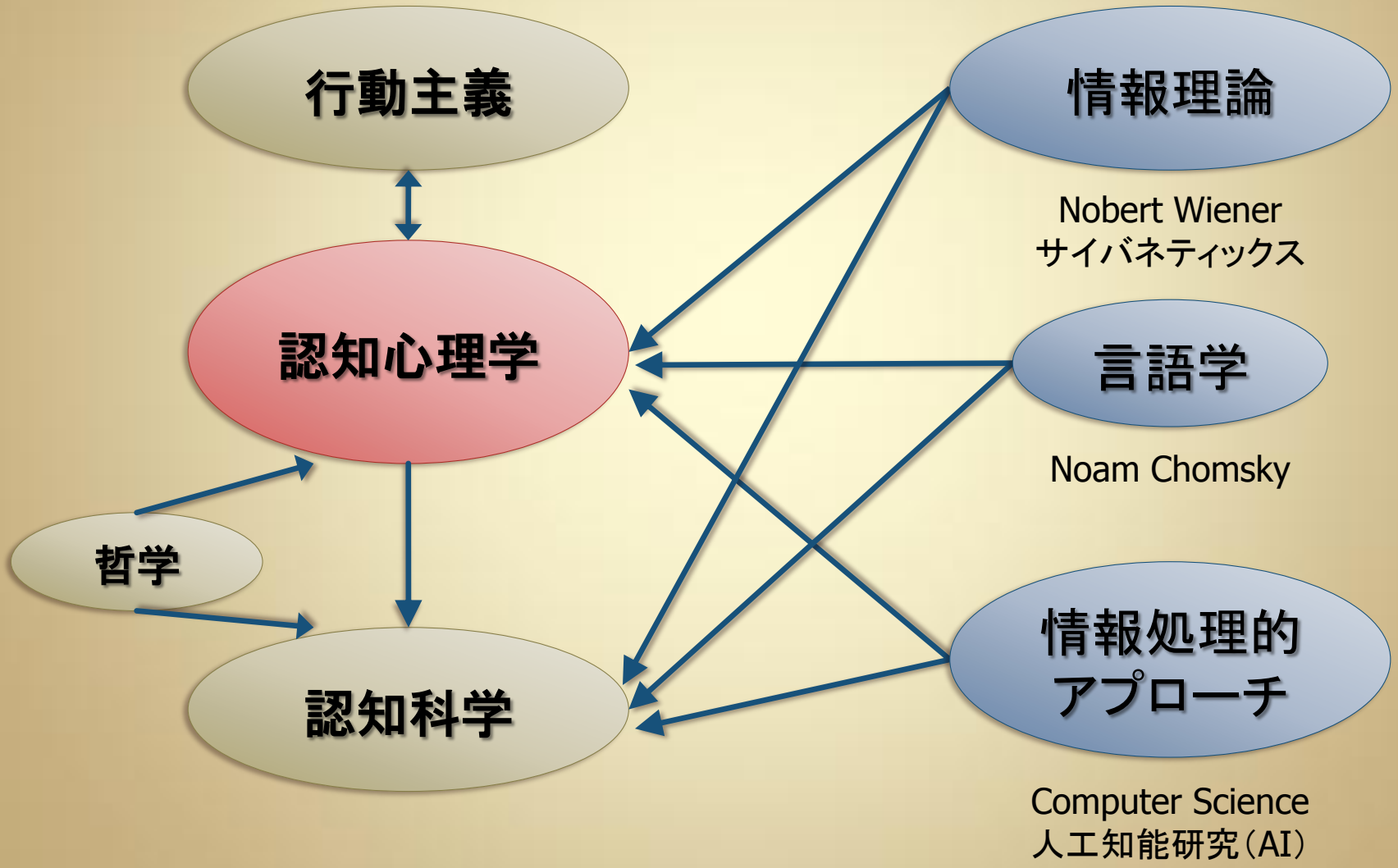
- チョムスキー（Chomsky）(1928-)
  - 言語心理学
- ナイサー（Neisser）(1928-)
  - 認知心理学の提唱
  - 「認知心理学」著
- マー（David Marr）（1945-1980）
  - 視覚心理学
  - 計算論的アプローチ

認知心理学

- 認知心理学：認知活動・精神を研究する学問
  - 通信工学や計算機工学の方法も利用。
  - 人間を一種の情報処理モジュールとして考える。
  - 1960年以降、情報理論、情報処理的アプローチ、言語学などの影響を受ける

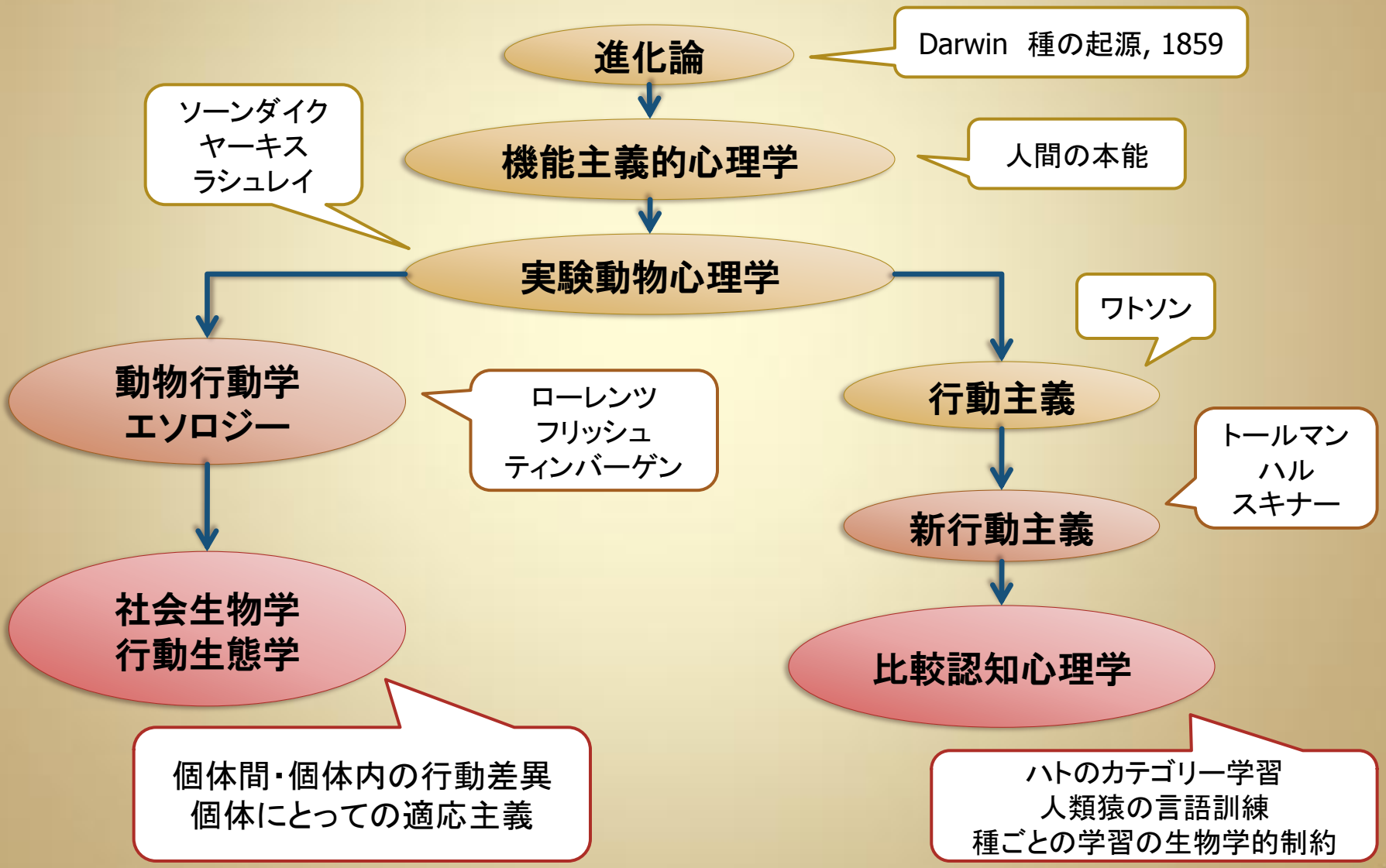
- 先駆者
  - （英）バートレット　：有意味材料を用いた記憶実験
  - （米）ブルーナー　：知覚・思考・発達、スキーマの概念
  - （米）ナイサー　：「認知心理学」
  - （英）ブロードベント　：記憶と注意のモデル
  - チェリー　：注意研究
  - ミラー　：「マジカルナンバー7±2」
  - シェパード　：「メンタルローテーション」
  - アトキンソン、シフリン：記憶の分類

認知心理学の台頭
（1960年以後）

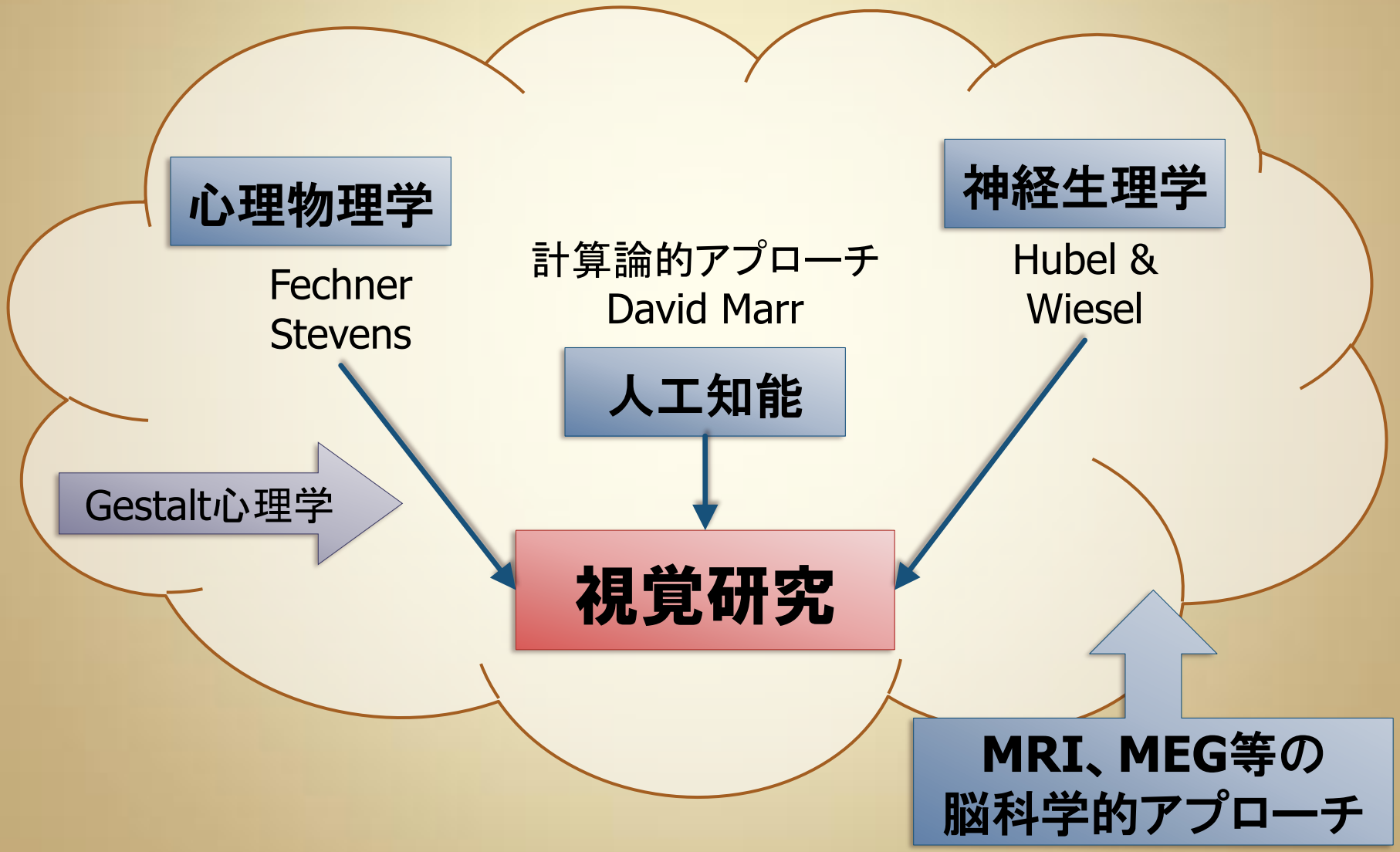


比較心理学の歴史的流れ

- 比較心理学　–動物と人間との比較



視覚研究の現状


心理物理学
Fechner
Stevens
計算論的アプローチ
David Marr
神経生理学
Hubel &
Wiesel
人工知能
Gestalt心理学
視覚研究
MRI、MEG等の
脳科学的アプローチ